
高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の時間外廊道じかんがいろついで

【Nコード】

N4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からない、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日？ になってから気づくのであった。

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする。人類の英知の結晶。

「あーうるさいな、誰だよ、こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがとでも分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。

どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つのため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

はつきり言おう。訳が分からない。俺の睡眠時間2分を返せ

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながらをは、またため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ちが良いと思うのは、新生活のスタートと言う出来事が加担しているのかもしれない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を二度も踏みたくはない。とはいえ、俺だつて、全く期待していないのは、嘘になる。そりゃ高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思っているのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のチェインメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺が学校に着き、自転車小屋へ我が愛車。まだ新車の19800円。命名『ギキユツパ』を駐車していると、校門の方から、馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かつて自転車を漕いで来る。

「よっおお〜！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かつて来る悪友に、

どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走って行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやった。

「グットモーニング！」

「うふー！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言ったら分かる？ 佐伯 利

一俺の名前は、愛田 あいだ 千秋 ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなものからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴ろうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の女子生徒が

かつ、かわいい

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクス共」

「……………」

時が止まった気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てる昇降口へと消えて行った。

第2話 1 - 3

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「……………」

時が止まったきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行った。

「……………おい、千秋」

その女子が立ち去った後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言った。
「何だ、馬鹿」

「高校つて怖えーな」

確かに、怖かったが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待ってよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒の学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受ける高校を調べて、同じところを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じところ受けやがって。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虐め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持っていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールムが始まるのは」

「おらああー！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を指し、前を向き歩きながら、我が悪友に背中を見せながら右手を頭上へと持って行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そうそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言っていたが、俺はそれをスルーし。

何事もなかったように、スタスタと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなっていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1-3に入ると、いかにも、始まった感じのういういしさ溢れる光景が広がっている。話しをしている者、席に座って静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでいる

る者、様々だ。まだ、慣れていというか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。げっ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さっき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。

普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしよう。

それから、1分程経つと、教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」
ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！
頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリア？　なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　このクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所が無い。速やかに在るべきところへ帰れ。
「え？　此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しましたー！！」

そう言つて、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3我がクラス内は、笑いに包まれた。
はあくアイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思つが。

第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって1日目という事もあり、これと言つて授業らしい授業もせず。あつという間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやって来た。

今日は、母親に作って貰った弁当だ、学校の売店というのを使ってみたかったが、こういうモノか分からないので、今日のところは無難に弁当を持ってきた。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作つて、机をくっ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日目じゃあ、まあ、こんなものだろう。

俺が弁当を鞆から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリップレイのように、また、利一がやって来た。

「ちあきー！一緒に弁当食おうぜー！！」
少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえった。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

.....

嫌な間だ、仕方がない。俺は右の手のひらを額にやり、はあくときなため息をつくと弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食お」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああ、脳細胞が死んだあー」

あすかわらずリアクションの大きい奴だ。

「良かったじゃないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの遺影を」
「ドガ！！」

「何か言ったか？」
利一は、流石に2発目のウォールアタックが堪えたのか、かすめるような声で

「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食うんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食ってくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もうコイツと俺の交友関係はきつとクラスの連中に残念ながら知られてしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると。

「この、ツンデレめー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はいい」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだろうが、女々しい声で俺の名を呼び、
「最近俺に対してのツッコミが激しすぎやないか？」

「何言っているんだ、利一はドMだから喜んでるんだろ？」

俺は、邪気の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドMじゃないからな、それともう少し柔らかく、ツッコンでもいいだろう？」

「そんな風になったら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだろう？」

コイツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だってさ 千秋優しいじゃん」

「はあ!？」

不意な言葉に少し動揺した。

「俺のどっ、何処か優しいだよ」

「俺なんかに構ってくれるしさ 不意な言葉にそんな驚くし。素直じゃん」

コイツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちよつと声に感情をこめて言ったが、

「顔が赤くなってるぞ」

「照れて無い、言ってるだろ!」

そんな事を言っているが、若干頬が熱い気もする。もしかしたら

顔が赤くなっているかもしれない。こんな事を面と向かって言われるのは苦手だ。

にやにやししながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い。無理に話しの流れを変えた。

「せっかく高校生になったんだから、決まってるじゃんか。天気も良いし、屋上で昼飯って、俺、やってみたかったんだよなー」

目を輝かせて、言う利一。

「おいおい、屋上っていったら、不良のたまり場ってイメージしかないんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思ってるんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が」

そして、屋上のドアを開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思つたら、目の前に在った光景は、煙草を啜えた、不良4人が立っていた。

絶滅危惧種居たー！ー！！

第4話 屋上

そして、屋上のドア開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思つたら、目の前に在つた光景は、煙草を啜えた、不良4人。

絶滅危惧種居たー！！

「あん！」

俺を含み一般高校生を睨む、男。

俺達は、囁くようにようにして、

「おい、利一、あんだつて、『あん』」

「『あん』つて何だよ、俺の知つている『あん』つて。俺の知つている『あん』つて、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のD V Dで観た、女の人の喘ぎ声の『あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どっかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在つたら、もうその国終わつてるよ、北〇鮮も真つ青だよ」

そんな、話を男達に聞き取れないくらいの声で話している時、俺は、二つ間違つている事に気付いた。そこに居るのは6人だと。不良らしき一人が、何故か分からないが、うつ伏せに倒れていて動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がいることにだ。

男4人が黒く分厚い本持った、女子生徒を囲んでいた、そして、ソイツは、朝、俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイトだ。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、覚えた。記憶力は、悪いほうだが、迫力のある苗字と、自分の名前と一文字被つていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意識をしなくても、頭に残つてしまつていた。

「鬼塚 千尋……」

そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちよつと、貴方達、臭いから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちっばけな脳じゃ、今の言葉を理解出来なかったのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そのフェンスから、飛んでくれないかしら？」

おい！ 煽ってどうするつもりだ？ 『勝ち目何かないだろ

う』普通なら、そう思うところだろうが、俺は、男達よりも、鬼塚の方が、怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

「どうするって、どうにかして助けるに

ドガ！

一瞬、鬼塚から目を離れた時、何か、鈍い音がしたと思って、鬼塚を含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹っ飛ばしたのだと。

「ガッ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失ったらしい。他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは、思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだった。

第5話 就寝

そして、男4人が倒れている場を悠々歩き、出入口つまり、俺達の方向へと歩いて来る。

「全く、人がせつかく、静かに昼食を取ろうとしてたのに、飛んだ邪魔が入ったわ」

俺と、利一の間を通る、鬼塚に俺は、

「おい、コレどうするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言つて、来るわ。まあ、最低でも、停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔は、してないわ　あと、やり過ぎ？　知った風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは、私の夢を汚したのよ」

そう言つて、鬼塚は、階段を降りて行った。

「ふう〜おかねえ〜」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「それより、飯は、どうすんだよ。こんな惨劇の現場で俺は食いたくねーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ねえな、教室に戻つて食うか」

「えー」

遠足が中止になった、小学生みたいな顔をする利一。

「やめろ、気色悪い。だまって、教室で食つてろ」

そう言って、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送ったの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな」

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思っているんだか」

「俺じゃ無いよ、俺だったら、千秋に送るんなら、もっと可愛くデコレーションしてやるぜ」

親指を立て、自信ありげに言う利一。マジ気持ち悪い。どうやらコイツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなってきた」

「えっ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、

「お前のせいだよ」

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙って、一人で飯食ってるよ、お前は、喋んなきゃ普通なんだからよ」

「痛てて、分かって無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ」

「お前今日、家に帰っても、家があると思つなよ」

「それどういう意味!?!」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食って、何も特に変わった事も無く、学校も終わり家に帰った。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる俺は、眠たくなり、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まって間もないと言うのに、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あつという間に、意識が無くなった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン!

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶「あーうるさいな」誰だ! こんな朝っぱらから、メールなどとしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝ころんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとも分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝を

している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「また？ 誰だよホントに」

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日にちを見た時、それは確信に変わった。

4月6日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日4月7
の筈だろ……

第6話 4月6日

4月6日水曜日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日
4月7日木曜日の筈だろ……

俺は、2階の自分の部屋から、1階のリビングにかけ降り、テレビを見た。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

妹が朝食を取っていたが、そんな事は、関係無い。俺はテレビのリモコンを回す。

ピ、ピッ、ピッピッ

「ちよっと、お兄ちゃん、私がテレビを観てたのに」

そんなことを妹が言っているが、今はお構いなしだ。そして、天気予報をやっている番組で俺の指は、止まる。

「今日、4月6日の予報は、関東地方を中心に快晴」

「なっ！？」 今日4月6日！？ おいおい、アナウンサーの間違

いか？ それともこれは、録画か何か！？

俺は、台所へ行き、朝食の支度をしている母さんに

「母さん！」

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「まだ時間は、あるでしょ、まあ、昨日、入学したばかりで、落ち着かないのは分かるけど」

昨日？ — 昨日の筈だろ 昨日はもう普通に学校へ行つて、利一を殴つたりして、鬼塚が、不良をやつけるところを見たりした筈だ。

「昨日が、入学式！？ — 昨日じゃ無くて！？」

「なに寝ぼけているの、昨日は、私と一緒に、入学式へ行っただじやない」

アレが夢？ アレが夢ならハイビジョンブルーレイも真っ青な高画質だぞ。

それから、今日だされた朝食も昨日と全く同じモノだ、テレビでやっているニュースも昨日観たモノと一緒にだ。

その後俺は、まだ事態を把握していないが、親も居るし、家に居ても進展が無いと思い、学校へと向かった。

自転車を漕ぎながら、情報を整理して、俺は、一つの結論を出した。

アレは、夢だったのか？ はは、そうだよな、夢だ夢。シークムント・フロイトさんも、確かこんな語録を残していたし「夢は現実の投影であり、現実が夢の投影である。」で在るって言ったし、まあ意味分かんねえけど。頭ではこの異常事態を解っているが、俺は現実逃避をして、自転車を漕ぐ。気分の問題なのか、体調が悪いのか分からないが、足は重く感じた。

第5話 人間時報

そして、学校へ着いた俺は、自転車小屋に自転車を置いていた。確か夢だと、ここで、校門の方から利一が馬鹿みたいに

「よっおお〜！愛ちゃん」

そう、言いながら、俺の方へ自転車を走らせる、利一。

んな、馬鹿な！ あれは、夢だった筈だろう、なんでここまで一緒なんだ！？ デジャブとか既視感なんて、レベルじゃあねーぞ！ 今日という時間が経つたびに、夢のいう逃避を壊されている気がした。

俺は自転車を漕いできた利一をスルーした、利一は、不思議そうな顔をしている。そりゃそうだ、いつもの俺なら何らかの、アクションを起こしていた筈だ、現に、あの時は、リアットを食らわしてやった。

自転車を置いた、利一が、俺の元へ歩いて来た。

「どうしたんだ千秋？ いつもと違うぞ、体調でも悪いのか？」

俺は、ふと思った、コイツなら

「利一、今は何時だ！」

利一は、何も見ずに、

「8時24分も26秒を回ったとこだけど」

「違う、何年、何日、何時、何分、何秒で聞いているんだ！

「なんだよソレ、どうかしたのか？」

「いいから、答えてくれ」

「ああ」

少し戸惑いながらも返事をする利一。

もし、世界中の時計が狂ったとしても、コイツだけは狂わない筈だ。それくらいに、俺は、時間に対して、利一に信頼している。

俺は、携帯の電波時計の表示に見ながら、利一の言葉と、照らし合わせる。

「今日は、201x年、4月」

もし、利一が全部在っていたのなら、俺の記憶を夢だと信じられる。利一が4月7日だと言えば俺は、俺は世界中の時計よりも、利一を信じる。あいつが時間を間違える筈は無い。何故なら利一は、人間時報。完璧な体内時計を持つ人間だ。俺は、中学から利一を見てきて、今まで間違った事など一度も無かった。

「6日 8時24分も52秒を回ったとこだけど？」

俺は、甘く見ていた、利一は、完璧な体内時計を持つ人間。7日か6日で俺は、この事を判断するつもりだった。だが結果は、ありえない方向へと向かった。

利一が8時24分も52秒と言った時、俺の携帯の電波が示していた、時間は、8時25分54秒。1分2秒も誤差がある。

「利一、携帯を貸してくれ」

「えっ何だよ？」

さつきから利一は、ずっと困惑気味だ、状況が読み込めて無いらだ。

「お前の時計と、俺の時計を見比べたい」

利一から、携帯を借り、自分の携帯と時刻を見比べる。もしかしたら、やはり俺の携帯がイカれているんじゃないかと思ったからだ。携帯は、同じ時刻を指していた。

「利一、お前か携帯、どつちかの時計が狂っているぞ」

「はあ？ そんな馬鹿な」

利一に携帯を返す。

「!?!? アレ」

利一も驚きを隠せないみただった。

「どっちが、正しいか、分かるか利一」

目を瞑り、集中する利一。

「俺だ……俺が間違っていた」

まさかと思っただが、利一が間違っていた。頭が痛い、重い。

「利一……俺、ちょっと頭痛いから、保健室へ行くわ」

「おい、大丈夫か。顔色メツチャ悪いぞ」

気遣うように、言う利一。

「ああ、大丈夫だから、早く教室へ行ってくれ」

「一緒に寝てやるのか？」

さっきと同じように、気遣うように、気持ち悪い言葉を口にする

利一。

「俺と法廷で戦いたいのか!？」

安心した顔で利一は、

「うん、そうじゃないとな、千秋は」

「じゃあな、教室に行くから、ゆっくり休めよ」

そう言っただが、利一は、教室へ向かって行った。安心したのは、俺もまだ。取りあえず、利一は、利一だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月18日10時45分発行